2026 年 5 月 7 日

『新装改訂版 現代数理統計学』

（竹村彰通 著，学術図書出版社）

正誤表　第 1 版第 8 刷用

頁	場所	修正前	修正後
69	下 9 行目	(3.19) 式より	(3.24) 式より
134	(7.33) 式	$\mathrm{Var}_\theta[T]$	$\mathrm{Var}_\theta[\delta^*]$
175	下 3 行目	$\delta_{5,0.03667}$	$\delta_{5,0.3667}$
204	下 9 行目	有意水準 $1-\alpha$ の受容域	有意水準 α の受容域
206	7 行目	未知の母数 θ を含む確率 (coverrage probability)	未知の母数 θ を含む確率 (被覆確率, coverrage probability)
213	下 6 行目	有意水準 $1-\alpha$ の受容域	有意水準 α の受容域
228	(10.71) 式（2 か所）	$>\chi^2_{k-1}(\alpha)$	$>\chi^2_{\alpha}(k-1)$
230	9 行目	p_2-p_1 の信頼区間としては以下の 2 標本問題の検定方式を変形して $$\hat{p}_2-\hat{p}_1\pm z_{\alpha/2}\sqrt{\left(\frac{1}{m}+\frac{1}{n}\right)\widetilde{p}(1-\widetilde{p})} \quad (10.81)$$ とおけばよい．ここで $\widetilde{p}$ は以下の (10.89) 式で定義される “プールされた推定量” である．	p_2-p_1 の区間推定は難しい．これは，$H_0: p_2-p_1=\theta_0$ の検定が攪乱母数 (p_1) に依存し，9.2 節で説明した信頼区間の構成が難しいためである．簡便法としては $$\hat{p}_2-\hat{p}_1\pm z_{\alpha/2}\sqrt{\frac{1}{m}\hat{p}_1(1-\hat{p}_1)+\frac{1}{n}\hat{p}_2(1-\hat{p}_2)} \quad (10.81)$$ を用いればよいが，実際の被覆確率が $1-\alpha$ より小さくなる傾向が多くの文献で指摘されている．この点についての議論や対処法については，例えば Agresti and Caffo(2000) が参考になる．
247	下 13 行目	$\widetilde{\beta}=(\mu,\alpha_1,\ldots,\alpha_k)$	$\widetilde{\beta}=(\mu,\alpha_1,\ldots,\alpha_k)^\top$
342	末尾		以下を追加してください． また以下の論文を参照した． Agresti, A. and Caffo, B., (2000), Simple and effective confidence intervals for proportions and differences of proportions result from adding two successes and two failures, *The American Statistician*, **54**, 280–288.